

デザイン思考と社会科歴史授業の学習構造に関する一考察

ーダブルダイヤモンド・モデルの観点からー

鈴木 正 行¹ ・ 池 田 良²

<要 約>

本研究では、子どもたちの豊かな発想を生かしながら、「深い学び」や「創造的な学び」を導く社会科授業の実現を目指し、歴史授業の実践事例を対象として、学習過程にデザイン思考を取り入れることの有効性と課題について検討した。実践事例の分析から、追究活動・交流活動やジグソー学習を組み込んだ授業において、それらの学習構造にダブルダイヤモンド・モデルの発散と収束の要素が見られることを確認した。

キーワード：デザイン思考、ダブルダイヤモンド・モデル、追究活動、ジグソー法

I. はじめに

本研究の目的は、単調で直線的になりがちな社会科の授業において、子どもたちの豊かな発想を生かしながら、「深い学び」や「創造的な学び」へと導く学習過程を生み出す方策の一つとして、デザイン思考を取り入れることの有効性と課題について、授業実践の学習構造の検討を通して明らかにすることである。

平成29年3月に告示された『中学校学習指導要領』及び『小学校学習指導要領』では、「主体的・対話的で深い学び」を通して、各教科で目指すべき資質・能力を育成することが求められている。だが、アクティブラーニング型の授業を行ったからといって、それがただちに「深い学び」、さらには「創造的な学び」へと結びつくわけではない。本学部の附属小学校・中学校をはじめ、全国各地の学校及び心ある教師たち

は、日頃から「深い学び」や「創造的な学び」に導くカリキュラム開発・授業開発に努め、実践的な研究を積み重ねている。だが、それらは実践者の経験と勘、そして個人的な努力に依存している面も強く、そのプロセスが理論的に解明されているわけではない。

近年、産業界ではイノベーション（革新）を導く新しい考え方として、デザイン思考が注目されている。香川大学でも、創造工学部を中心に、デザイン思考の能力育成に向けた取り組みが進められている。千葉敏生によれば、デザイン思考とは、「製品開発や問題解決にデザイナーの思考を取り入れる人間中心のアプローチ」である⁽¹⁾。ティム・ブラウンは、「多くの場合、私たちは物語を通じてアイデアや文脈に意味を与える」としている⁽²⁾。このことから、デザイン思考は、問題解決にあたり、人間が持

1 香川大学教育学部

2 香川大学教育学部附属高松中学校

つ「物語」の能力を活用しながら、発散的思考と収束的思考を繰り返して行われる、人間中心の創造的な思考プロセスであると捉えられよう。

社会科では、これまでも概念探求(究)学習、意思(志)決定学習、問題解決学習、シミュレーション学習、参加型学習、社会参加(参画)学習、政策提案型学習、調査学習など、様々な学習論・学習方法が開発されてきた。その中には、デザイン思考を取り立てて意識することがなくても、既にその要素が内包されている授業実践も存在する。だが、デザイン思考を小・中学校の授業実践に意識的に取り入れようとする実践研究は緒に就いたばかりであり、社会科における先行研究はわずかである。管見によれば、兵庫教育大学附属小学校がデザイン思考を中核に据えて研究を進めており、森清成教諭が創造性の育成をめざして、システム思考とデザイン思考を組み合わせた社会科産業学習の単元開発を行っている⁽³⁾。ただし、森の場合はダブルダイヤモンド・プロセスよりも、観察(observation)、発想(ideation)、試作(prototyping)を繰り返しながらチームで「協創」することに重点を置いているところに特徴がある。

筆者らは、デザイン思考とくにダブルダイヤモンド・デザインプロセスモデル(以下、ダブルダイヤモンド・モデルとする)の4段階(探索、定義、展開、提供)、及びそこで展開される「発散」・「収束」に着目し、「深い学び」や「創造的な学び」に至る授業の構造を探る上での手がかりとしたい⁽⁴⁾。本稿は、そのための基礎的研究である。

そこで、筆者らが過去に行った中学校社会科歴史学習の授業実践を対象として、追究活動・交流活動やジグソー法を組み込んだ学習過程に焦点を当て、デザイン思考とりわけダブルダイヤモンド・モデルとの関係性について、次のような手順で検討する。はじめに、製品開発のための創造的思考法であるデザイン思考と、学校の教育活動である社会科授業との関係性を探ることの意義について検討する。次に、鈴木による追究活動を組み込んだ中学校社会科歴史学習の大単元《学習のくくり》を対象に、学習過程

に見られるダブルダイヤモンド・モデルの要素を捉える。さらに、池田良教諭(香川大学教育学部附属高松中学校)によるジグソー法を用いた探求型の社会科歴史学習の授業実践をもとに、ジグソー学習の特質と課題について考察する。これらの検討を通して、豊かな発想を引き出しながら、「深い学び」や「創造的な学び」を導く授業設計の方向性を探りたい。

II. デザイン思考のプロセスモデル

D.A. ノーマンによれば、ダブルダイヤモンド・モデルは、2005年に英国デザイン協議会によって生み出されたものである⁽⁵⁾。それは、デザイナーが問題を解決する過程で行う、発散と収束を繰り返す二重のパターン(発散—収束—発散—収束)によって構成され、以下のような①～④のプロセスを辿る(図1)。

◇正しい問題を見つけるダイヤモンド

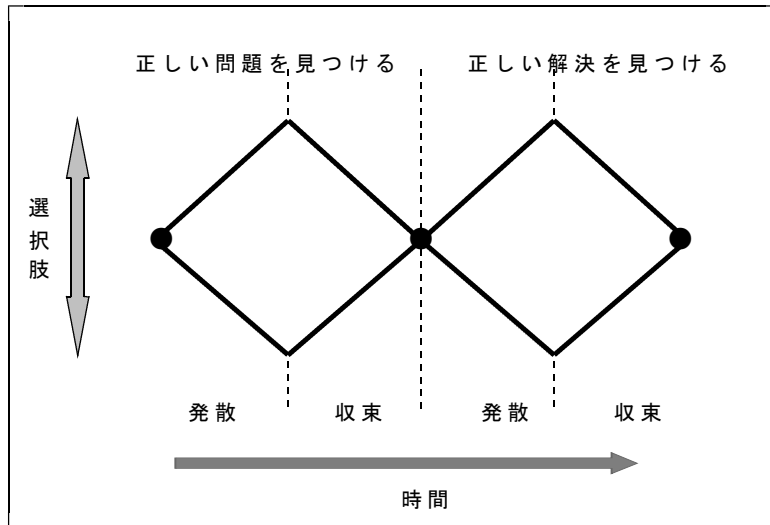
- ①探索：発散(与えられた問題に横たわるすべての根本的な問題を発散的に調べ問題の範囲を広げる。)
- ②定義：収束(問題記述を一つに絞り込み収束する。)

◇正しい解決を見つけるダイヤモンド

- ③展開：発散(可能な解決策の空間を広げる。)
- ④提供：収束(解決策を提案する。)

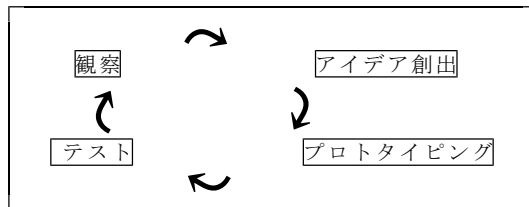
これに加え、D.A. ノーマンは、人間中心デザインプロセスが、ダブルダイヤモンドの発散—収束プロセスの中で行われるとしている⁽⁶⁾。同時に展開される人間中心デザインプロセスは、(1)観察、(2)アイデア創出(アイディエーション)、(3)プロトタイプング、(4)テスト、という4つの異なる活動からなる(図2)。これらの活動が反復サイクルによって繰り返されることで、より深い洞察が生み出されて望ましい解決に向かっていくとされる。

また、ティム・ブラウンは、「収束的思考は、既存の選択肢の中から判断を下す場合には実用的だ。しかし、未来を探索したり、新たな可能性を生み出したりする場合には、収束的思考ではうまくいかない」と述べ、問題解決におい



D.A. ノーマン『誰のためのデザイン?』(p.308)より引用

図1 デザインのダブルダイヤモンド・モデル



D.A. ノーマン『誰のためのデザイン?』(p.308)より引用

図2 人間中心デザインの反復サイクル

て、収束的思考が「解を導き出す原動力」であり、発散的思考の目的を「選択肢を増やすこと」であるとした⁽⁷⁾。その上で、創造の過程では、発散と収束、分析と総合が繰り返し絶え間なく行き来することが重要だとしている。

ただし、気をつけなければならないのは、デザイン思考を取り入れたからといって、必ずしもイノベーションが起こるわけではないことである。むしろ製品開発においては、試みのほとんどは失敗に終わり、失敗の積み重ねの中から、わずかながら成功がもたらされるという場合が多々ある。授業においても、デザイン思考を取り入れたからといって、それがただちに創造性の育成に直結するという保証はない。デザイン思考は、革新的な製品開発を目的とする際の思考プロセスであり、学習者の成長・発達を

促す学習活動とは基本的に目的が異なる。しかし、授業にデザイン思考を取り入れることにより、学習者の発想が豊かになり、「深い学び」や「創造的な学び」を導く可能性をもつことが期待されるのである。

なお、発散と収束による思考方法は、すでに1960年代後半には、川喜田二郎が開発したKJ法において示されており、D.A. ノーマンやティム・ブラウンが先駆者というわけではない。川喜田は、独創的解釈や発想を生み出す「基本的発想データ群」から一つのヒントが飛び出す思考過程を「収束性思考」、複数のヒントが生まれる場合を「発散性思考」、データ群内の複数の要素が互いに影響して複数のヒントが生まれる場合を「収束かつ発散性思考」と呼んでいる。その際、第一次「基本的発想データ群」から第

二次「基本的発想データ群」を設定する手順について、直線的に固定しすぎないように注意を促しており、授業過程の在り方を考える上でも示唆的である⁽⁸⁾。

以上、デザイン思考について、発散と収束を中心に概観した。次章以下では、具体的な授業実践の学習構造とダブルダイヤモンド・モデルとの関係性について考察する。

Ⅲ. 実践の捉え直しとカリキュラム開発

1. 大単元レベルの構造—鈴木実践から—

(1) 大単元《学習のくくり》の構成

デザイン思考におけるダブルダイヤモンド・モデルは、カリキュラムを構造的に設計しようとする際に、単元レベルでも1時間の授業レベルでも有効であると考えられる。

ここでは、大単元レベルで構造的に行った事例として、過去に鈴木が実践した中学校歴史的分野の《学習のくくり》「民衆の時代へ」を対象に検討する⁽⁹⁾。

鈴木は、市民革命および幕末・明治維新から第二次世界大戦終結にいたる過程をまとめて、《学習のくくり》「民衆の時代へ」(40時間)を設定し、地域史資料を活用した授業、地域の歴史調査学習、近代史全体を貫く追究活動を組み合わせた学習計画を立てた(資料1)。《学習のくくり》は、Ⅰガイダンス→Ⅱつかむ学習(基盤づくり)→Ⅲつくる学習(追究活動)→Ⅳつなぐ学習(交流活動・振り返り)の4段階の構造からなる大単元である。ガイダンスは、生徒に課題意識と学習の見通しを持たせる段階である。つかむ学習は、基礎的・基本的な学習内容を身につけることを重視しており、一斉学習のほか、ミニ追究、ミニ交流、討論などを行う段階である。つくる学習は、《学習のくくり》でめざす価値に迫るため、教師が設定した共通テーマに基づき、生徒がつかむ学習で学んだことを振り返り、個人テーマを設けて追究活動を行う問題解決的段階である。つなぐ学習は、追究活動の成果を生かし、他者との交流や討論等を行う段階である。

資料1は、《学習のくくり》「民衆の時代へ」

の学習構想を示したものであり、主に次のような学習活動を展開した。

①ガイダンス

市民革命から第2次世界大戦までの大まかな歴史の流れを示すとともに、「戦争は多くの犠牲と悲しみを生み出すものであるにもかかわらず、日本が近代化の過程で戦争を次々に行っていたのはなぜか」と問いかけ、「民衆の時代へ」の学習を通して、日本の近代化の光と陰について考えていくことへの意識づけを図った。

②つかむ学習(基盤づくり)

ア) 小単元「自由民権期の民衆運動」を構想し、身近な地域の歴史資料をもとに、地域民衆の視点からみた歴史像を構成することをめざす学習活動を行わせた。

イ) 身近な地域の歴史調査の方法について指導し、学校外での調査が可能な夏休みの課題として、身近な地域の民衆に焦点をあてた歴史調査を行わせ、レポートを課した。

ウ) 明治初年の諸政策を調べさせ、明治政府のスローガンである富国強兵の実現のために、自分が考える重要度について、ダイヤモンドランキング法によって順位をつけさせた。その上で、個人で考えたランキングをもとに小グループで話し合わせ、グループによる順位づけを行わせた。これにより、歴史的思考力に加え、意思決定力や合意形成力の育成も図った。

エ) 「自分が武士だったら開国か攘夷か」、「自分が当時の国民だったら日露開戦に賛成か反対か」をテーマに討論学習を行わせた。

③つくる学習(追究活動)

つかむ学習全体を振り返り再構成する追究活動を行わせた。追究活動を行う際の共通テーマは、「日本の近代化は人々に何をもたらしたか—人々の幸せの視点から考えよう—」とした。生徒たちは、共通テーマの解決に向けて、個人テーマを立て、各自

デザイン思考と社会科歴史授業の学習構造に関する一考察

資料1 《学習のくくり》「民衆の時代へ」の学習構想

学習のくくり「民衆の時代へ」では、近代社会の成立から現代にいたる時期を対象に学習し、現代社会の成り立ちに関する歴史認識を育成するとともに、未来の社会を築いていくこととする態度を養うことをねらいとする。そこで、生徒には民衆にとっての幸せという視点から日本の近代化の光と影について問い直させ、歴史的事象を多面的・多角的・論理的に考察し認識する力を育てたい。また、国家の政策と身近な地域の歴史事象とのかわりなどを通して、地域の民衆の視点から日本の近代化についてとらえさせたい。

学習のくくりのガイダンス（1時間）			
「戦争は多くの犠牲と悲しみを生み出すものであるにもかかわらず、日本が近代化の過程で戦争を次々と行っていったのはなぜか」という課題について、学習のくくりを通して解決をめざそうとする意識づけを行う。			
つ	《問いかけ》		《資料の活用》
	《用語・事象の理解》		《見方・考え方》
	<ul style="list-style-type: none"> ○産業革命が最初にイギリスで起こったのはなぜか。 ○欧米諸国はどのようにアジアへ進出したか。 ○開国と攘夷、どちらを選択すべきか。 ○江戸幕府はどのようにして滅びたか。 ○明治維新の諸政策は、富国強兵の実現にどのように影響したか。 ○日本はどのようにして政治の近代化を進めたか。 ○日清・日露戦争が起こったのはなぜか。戦争の結果はどのようなことをもたらしたか。 ○産業の発展によって人々の生活は本当に豊かになったか。 ○第一次世界大戦が起こったのはなぜか。 ○日本はなぜ戦争への道を歩んだか。 		<ul style="list-style-type: none"> ○国王の処刑の様子を描いた絵画資料や権利の章典、人権宣言などの文獻資料をもとに、市民革命の原因と結果について考察する。 ○工場で働く労働者の絵やその他の資料から、女子や子どもを含む労働者がどのような労働条件の下で働いていたか調べ、その理由を考察する。 ○イギリス・インド・清間の貿易品（綿織物・綿花・茶・絹・陶磁器・銀・アヘン）の動きを図示し、インド綿工業の壊滅的打撃や欧米諸国のアジア侵略の実態について考察する。 ○開国が攘夷か、幕末の日本が置かれた国際情勢や国内の状況を調べ、それをもとに討論を行い、歴史的判断の重要性について考える。 ○幕府、薩摩藩、長州藩、イギリス、フランスの対抗の図式について、年表をもとにまとめる。 ○百姓一揆・打ちこわし件数のグラフや農村工業の様子を描いた資料をもとに、封建社会の矛盾の増大について考察する。 ○明治維新の諸政策について調べ、政府のローガンである富国強兵に影響した重要度を考え、ランキングを行う。 ○大日本帝国憲法、日本国憲法、民権派の憲法草案を比較し、国民の権利や人権について考察する。 ○自由民権運動の過程をまとめたものと、近代化の進展と人々のかかわりについて考察する。 ○日本・清・ロシア・朝鮮の関係図をもとに、日清・日露戦争の原因を考察する。 ○ロシアとの戦争に賛成か反対か。当時の開戦派・非戦派の主張をもとに討論し、日露戦争の原因について考察する。 ○都市や農村の暮らしの変化、製糸女工の労働条件、足尾銅山鉱毒事件などの資料をもとに日本の近代化の光と影について考察する。 ○欧米列強による世界分割やバルカン半島の状況を表した地図、列強間の関係図をもとに、欧米列強の対立や民族独立への動きについて考察する。 ○経済と戦争との関係に着目し、ニューディール政策など各国の動きを示す資料を通して戦争の起こる原因について考察する。 ○統制の強まる過程を年表にまとめ、民主主義の風潮が全体主義へ急変していく理由を考察する。 ○浜松大空襲など身近な地域の歴史を調べ、民衆の視点から戦争について考える。
	<ul style="list-style-type: none"> ・絶対王政 ・清教徒革命、名誉革命 ・フランス革命、独立戦争 ・産業革命、大量生産 ・資本主義、社会主義 ・インドの大反乱 ・三角貿易 ・アヘン戦争、南京条約 ・太平天国 ・尊皇攘夷、安政の大獄 ・ペリー来航 ・日米和親条約 ・日米修好通商条約 ・明治維新、戊辰戦争 ・大政奉還 ・王政復古の大号令 ・薩長同盟 ・ええじゃないか ・世直し一揆 ・五箇条の御誓文 ・版籍奉還、廃藩置県 ・地租改正、学制、徴兵令 ・富国強兵、殖産興業 ・日朝修好条規 ・琉球処分 ・自由民権運動 ・内閣制度 ・大日本帝国憲法 ・帝国議会、教育勅語 ・帝国主義 ・日清戦争、三国干渉 ・日英同盟、日露戦争 ・韓国併合 ・不平等条約の撤廃 ・産業革命 ・八幡製鉄所、財閥 ・小作半減、労働組合 ・民族独立運動 ・ロシア革命 ・ベルサイユ条約 ・国際協調、国際連盟 ・大正デモクラシー ・米騒動 ・世界恐慌、ブロック経済 ・ニューディール政策 ・第二次世界大戦 ・十五年戦争 ・アジア ・太平洋戦争 		<ul style="list-style-type: none"> ○市民革命によって、市民が政治的・経済的自由を獲得したことにより、自由な経済活動が展開され産業が発展した。 ○市民革命により、国民国家成立の端緒が開かれた。 ○市民革命によって経済活動の自由を得た市民が、産業資本家として成長し、産業革命の担い手となった。 ○産業革命によって、資本家と労働者という関係が社会の中心となり、不平等が広がるなど、社会的矛盾が生じた。 ○産業革命によって大量生産を行うようになった欧米諸国は、商品の市場と原料の供給地を求めてアジア・アフリカ地域に進出し、武力を用いて植民地化していった。 ○厳しい国際情勢と国内での体制的矛盾が増大する中で、幕府は鎖国から開国へと外交を転換せざるを得なかった。 ○日米修好通商条約は、南京条約と同様な内容の不平等条約である。 ○複雑な政治情勢や国際関係の中で、薩長は現実的な対応として、攘夷から開港へと方針を転換した。 ○封建制度では、帝国主義段階に入ろうとしていた世界情勢には対応できず、日本は強力な中央集権国家を必要とした。 ○幕府滅亡の原動力として、一揆など民衆の抵抗運動があった。 ○明治政府は、太政官制、廃藩置県、地租改正、徴兵制、学制、四民平等、官営工場模範設立、北海道の開拓、岩倉使節派遣などの富国強兵政策により、中央集権的な近代国家をつくり出そうとした。 ○大日本帝国憲法の制定によって、日本は近代国家としての体裁を整えたが、天皇制に依拠した国家の権限が強く、国民の権利が厳しく制限された憲法であった。 ○政府に批判的な士族によって始められた自由民権運動は、やがて豪農・都市知識人へとその担い手が移るとともに、その思想は窮乏した生活から救われたと願う一般民衆にも影響を与えた。 ○日清・日露戦争は、欧米列強の模倣をして影張主義をとる日本が、満洲・朝鮮の支配権を獲得しようとして行った戦争である。日本の勝利はアジア諸国の民族独立運動に影響を与えたが、その一方で、日本は帝国主義国の一員となり、満洲進出や韓国併合を行った。 ○文化や産業の発展の影には、農村における貧富の差の拡大、劣悪な労働条件下での労働、公害の発生など、急速な近代化の中で生じたむくみがか大勢いた。 ○第一次世界大戦は、イギリスとドイツの対立を中心とした帝国主義国による植民地獲得戦争である。 ○第一次世界大戦の後、アジアでの民族運動が高まった。 ○第二次世界大戦は、持てる国と持たざる国との対立による植民地への再分割戦争である。 ○経済の行き詰まりから、日本は市場と原料の供給地を求めて中国に侵略した。 ○全体主義は、一部の人々に対する弾圧から始まる。 ○日本国民は、戦争の被害者であると同時に加害者でもある。
	共通テーマ 日本近代化は人々に何をもたらしたか 一人一人の幸せの視点から考えよう		
	<p><個人テーマ設定で期待される生徒の姿></p> <ul style="list-style-type: none"> ○日本の近代化が人々に与えた影響について、つかむ学習の内容を大きく振り返って再構成し、具体的な事件などをもとに光と影の両面からとらえようとしている。 ○身近な地域に起こった歴史的事象について調べたことを生かし、日本の近代化が人々にもたらした影響についてとらえようとしている。 <p>【個人テーマ例】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・近代化により人々の暮らしはどのように変化したか。 ・産業の発展は人々を幸せにしたか、浜松の産業を通して考えよう。 ・日本の近代化と女性の地位の関係について探ろう。 ・十五年戦争について調べ、人々と戦争のかかわりを探ろう。 ・自分の家族の歴史を調べ、家族と近代日本とのかわりについて考えよう。 <p>など</p>		
つくる学習5時間	<p><追究活動で期待される生徒の姿></p> <ul style="list-style-type: none"> ・人々の欲望の肥大化が、戦争や侵略などの争いの根拠にあることに気づき、つかむ学習で学んだ具体的な社会事象をもとに自分の考えをまとめようとしている。 ・歴史的な事件やできごとに対して、多面的・多角的・論理的にとらえようとする努力、自分の考えをまとめようとしている。 ・歴史的事象について、現代の社会と対比しながら、自分たちの問題としてとらえ、自分の考えをまとめようとしている。 ・身近な地域に起こった歴史的事象やできごとを調べ、産業の発展の光と影など日本の近代化の影響と関連づけてとらえようとしている。 ・外交や国政にかかわるできごとについて、国家や為政者の視点からだけでなく、民衆の視点からとらえようとしている。 ・テーマの解決に向け、丹念に資料や情報を収集し、じっくりと考察してより深い追究を行おうと努めている。 ・資料や情報の収集にあたり、得られた情報をそのまま受け入れるのではなく、資料・情報の是非や適否を慎重に判断し活用しようとしている。 ・追究途中の交流を通して、他者の追究のよいところに気づき、自分の追究に生かしたり、他者へのアドバイスを行ったりしている。 <p>など</p>		
	<p><交流活動・振り返りの記述・振り返りの記述の交流で期待される生徒の姿></p> <ul style="list-style-type: none"> ・産業の発達について、人々の生活を次第に便利にしていったことと、劣悪な労働条件のもとで働くざるを得ない労働者が増加したことなど、光と影の二面性に着目して語り合っている。 ・戦力の強大さや工業生産力の増大などおもてにあらわれる国家の繁栄が、必ずしも国民一人一人の幸せに繋がるわけではないことについて、民衆の立場から歴史的事象をみることによって指摘している。 ・身近な地域の歴史的事象について調べたことをもとに、地域の民衆の視点からみた、日本の近代化が人々に与えた影響について具体的に説明している。 ・交流相手の語りに真摯に耳を傾け、互いに相手の学びが更によくなるよう、これまでの学びの成果を生かして適切にアドバイスを与えている。 ・優れた見方・考え方や「光る言葉」など相手の追究のびが良かった、なぜ良いのかを認め、交流相手に伝えたり全体場で紹介しようとしていたりしている。 		
つなぐ学習4時間			

資料2 追究活動個人テーマ表

No.	個人テーマ
1	産業革命が起こったことにより、人々にどのような影響を与えたか。
2	産業の進歩がもたらした光と影を追究しよう。
3	明治時代の日本と外国の関係を探ろう。
4	人々は工業の近代化によって幸せを得ることができたか。
5	戦争により日本国民が得たものは何か？
6	日本の産業の発展の中で、浜松の産業の発展はどのように関わっていたか。
7	江戸時代の三大改革と明治政府の政策を比較しよう。
8	日本の産業革命によって、経済や人民の不満はどのように変わったか。
9	日本の産業革命は農民たちにどのような影響をもたらしたか。
10	日清・日露戦争が人々に与えた影響を探って、戦争と人々について考えよう。
11	日本の産業の近代化は人々にとって本当に良かったものだったのか考える。
12	日清・日露戦争から浜松学童疎開までの人々の生活の流れ。
13	日清・日露戦争やその当時の人々の気持ちから探ろう。
14	日本の産業の急激な発達、人々の生活を幸せにしたか。
15	日清・日露戦争から太平洋戦争の人々について追究しよう。
16	日清・日露戦争をすることで、人々は幸せになったか？
17	明治から大正までの自由民権運動等の人々の動きと近代化との関わりを探る。
18	産業革命によって社会はどのように変化したのか、ヨーロッパと日本を比較。
19	江戸時代の年貢が地租に変わったことは、人々にどのような影響を与えたのか
20	明治維新の一つ一つの改革とそれに対する人々の反乱から探る。
21	日露戦争とはよかったことなのか、日本の近代化から考えよう。
22	日露戦争をやったことで世界にどのような影響をもたらしたか。
23	学制や義務教育は人々に幸せをもたらしたのだろうか。
24	四民平等や解放令は、人々の間の差別をなくし幸せをもたらしたか。
25	産業の発達が人々にもたらした光と陰について考える～軽工業を中心に～
26	江戸時代から明治時代にかけての教育について、学制を中心に比較しよう。
27	日清・日露戦争は本当にやらなくてはならないことだったのか。
28	明治維新で定められた学制は、人々に幸せをもたらしたか。
29	日本と朝鮮の関係や植民地化による人々の生活・気持ちの変化を考える。
30	人々の暮らしから、近代化が人々にもたらしたものを探る。
31	日本が近代化する中で、被差別部落の人々の生活はどのように変化したか。
32	日清戦争と日露戦争が与えた人々の影響とは？
33	農村の人々の立場や動きから考えよう。
34	明治維新の政策は、のちの人々にどのような影響をもたらしたのか？
35	日清・日露戦争の勝利は、本当に人々に幸せをもたらしたか。
36	日清・日露戦争は、人々にどう影響したか？
37	日露戦争の経緯から光と陰を探し、人々にもたらした影響について考えよう。
38	戦争が互いの国にもたらすものとは？一勝った国の人々は幸せになれるかー
39	明治維新の政策により、人々の生活はどのように変化していったのか。

で追究活動を行った(資料2)。追究活動の成果は、基本的にB4判用紙1枚にまとめさせた(資料3)。場合によっては、数頁のレポート形式(A4判)で作成させた。

④つなぐ学習(交流活動・振り返り)

追究活動の成果を2～3人の小集団で紹介

し、検討し合う交流活動を行った。さらに、そこで得られた優れた見方・考え方や知見、「光る言葉」等を全体の場で紹介する活動を行った。最後に、《学習のくくり》全体を振り返って、自分の考えを記述させたのち、振り返りの記述による交流活動を行った。

資料3 追究のまとめ(例)

< 民 衆 の 時 代 >

2年3組25番()

(共通テーマ)

日本一人々の近代化は人々に何をもちたらしめたか。

(個人テーマ)

産業の発展が人々にもちたらしめた光と陰について考える。～軽工業を中心に～

光 -light-

○生産量の増加 (歴史科専修(知事研究))

産業革命で大量の商品がつくられると、国内だけで消費できず海外の市場を求めた。日清戦争後は綿糸の輸出量が急激に増え、輸出は外貨獲得の大きなチャンスになった。その後、市場も拡大され、貿易高はとも伸びた。また機械の発達で高度な技術が身につく人々も増えた。

○女性の社会進出

産業の発展で多くの女性が働きに出ると、今まで家のためだけに存在していた人として認められるようになった。文学の世界でも堂々と発言する女性の存在が強くなった。労働者という立場にならざるに社会へ進出していた。

○資本主義経済の発達

日本は日清戦争後、金本位制を確立した。これにより他国との貿易で日本の国際的な信用が向上した。また、特定の分野に資金を供給する銀行も設立され、始め資本主義発達の基礎を築くと同時に、工場が増えるなどにもつながった。(日本の産業革命(大工正久氏)1968年4月15日)
(産業革命(高杉早苗)1999年4月1日)

産業の発展の光と陰とは？

-shade- 陰

○労働問題

労働者の多くは農村出身者であり、自分達の生活をより良くするために努めた。低賃金と長時間労働、暴力的な監視という過酷な条件が押しつけられ、逃亡者や自殺を考える者があつた。病気がうつる人もいたが、企業利益優先で働かせ続けた。

○女性の権利 (女性の権利の歴史(近世女子会館蔵))

労働者のほとんどが女性(女子)であり、女工として借金返済のため毎日働いていた。資本家の間で自由に譲渡される「権利工女」とされ、男性と同等の格差の低賃金という状態だった。

	人数	平均日給
男工	18.1人	23.4銭
女工	36.9人	8.3銭

1889年、静岡県史
通史編5より

○貧富の差

政府は社会発展のため、富国強兵をもちに工業に重視していたので、農業政策は遅れ、貧富の差は拡大するばかりであった。安く輸入するものもあり、農家の収入は安定せず生活できない状態だった。

産業の発展は人々にとって良かったことなのか？

この後の日本の発展(社会面でも工業面でも)には、欠かせないものを吸収したことで、とても大きなチャンスだったのでないかと思う。日本人1人1人が社会に深く関われるようになった。各地域の主な産業が確立し始め、産業の面だけでなく、国がまとまりをみせてきたので、産業の発展は、1つのターニングポイントだったのではないだろうか。日本全体の視点から見れば、この時期を乗り越えたからこそ、今の安定した暮らしがあるということ。良かった、という答えになる。人々にとっては、あまよにも辛すぎる状況だったと思うが、そういう体験があったからこそ、その後プラスになったこともあるのではないかな。

●産業革命は人々にとって良かったことなのか。その、私自身の答えは、上で述べた通りだが、あくまでも一つの視点から見た答えなので、本当に良かったのかはまた考えさせられるところがある。けれど、この出来事は、日本が色々な面で変化していくきっかけになったことは確かだと思う。特にこの軽工業は外国と接触する機会も多いので、日本の世界進出にも関わる。現在の日本産業の基盤に於いては、大きな役割を果たしている。

●私が今回追究したことも含め、自分なりの共通テーマの答えは、日本の近代化は人々に変化のチャンスをもたらし、ということ。しかし、当時の人々は戦争や労働など、犠牲も多く、幸の視点から考えると最悪な状況にたてられていたのだと思う。どちらにしても、この近代化は国としての発展を優先して、強引なものであった。というのが私の考えた。

(2) ダブルダイヤモンド・モデルの観点から
本実践において、発散と収束が大きく作用する場面は、③と④の段階である。③では、単元の本質に迫る共通テーマを提示することによって、生徒にこれまでの学習を大きく振り返って

リフレクション(学びの省察・再構成)を促すとともに、共通テーマの解決に向けて個人テーマの設定を行わせ、各自の追究活動へと導いた。これにより、つかむ学習での収束した状態から、個人テーマを設定する際に発散がな

れ、追究活動において収束に向かう。続く④では、各自の追究成果をもとに交流活動を行わせる中で発散が起る。そして、全体での紹介と振り返りの記述によって収束に向かい、さらに振り返りの記述の交流で発散が起る。振り返りと問い直し、追究活動、交流活動、振り返りの記述を組み合わせることで、発散と収束の繰り返しとなされる構造になっている。

本事例では、大単元レベルの構造を明らかにしたが、1時間レベルの授業におけるダブルダイヤモンド・モデルの構造は示していない。そこで、次節では池田実践をもとに、1時間の授業レベルに内在するダブルダイヤモンド・モデルの要素に焦点を当てて考察することとする。

2. 1時間レベルの構造—池田実践から—

(1) 単元及び授業の構成

本研究で考察の対象とする単元「軍国主義と日本の行方」(資料4)は、池田が2015年6月に行った実践である⁽¹⁰⁾。授業では、満州事変を題材として、当時の国民の多くが日本の満州侵略を支持していたという事実を通して、「戦争は悲惨で避けるべきもの」という現代的感覚による単純な常識や言説に対する批判的思考を促し、戦争が支配層や軍部の力のみによって引き起こされたのではなく、その陰に国民の支持があったことを気づかせ、戦争を防ぐことの難しさと平和の大切さを理解させることを目指した。

戦争が人々に受け入れられ、継続・拡大した要因として、世界恐慌への対応、軍部の暴走、ポーツマス条約により獲得した権益の保持、人権軽視の政治などがある。このような政治や経済、外交などの国策と深く関係する諸情勢に加え、人口増加への懸念、マスコミ報道によるプロパガンダの影響等、社会的側面もある。戦争が受容される様々な要因を資料から読み取って導出し、関連づける学習によって、学習者自身の中に歴史認識が主体的に再構築されていった。

第3次第2時の授業では、ジグソー学習法によるコース別の調査と話し合いの場を設定し、次の①～④の手順で学習活動を進めた(資料5)。

①4人の小集団によるチーム編制を行う。

②「政治と戦争継続・拡大」「経済と戦争継続・拡大」「外交と戦争継続・拡大」「民衆と戦争継続・拡大」というテーマについて、分担して調査を行う。

③チーム内で話し合い、多様な見方・考え方を共有する。

④チームで各要因の組み合わせ、相互関連の有無を再検討する。

ここで重要なのは、単に諸要因の多様性や優劣を述べるだけではなく、諸要因の相互作用や相乗効果の有無とその度合いの検討を踏まえることである。「国民は、なぜ戦争を受け入れたのか?」という問いに対して、学習者自身が小集団活動の中で主体的に問題解決に向かうことを目指した。

(2) ダブルダイヤモンド・モデルの観点から

展開部の前半は、ジグソー法を取り入れた。一つ目のダイヤモンドにおける拡散という点から見ると、政治、経済、外交、民衆という4つの視点に絞っている点で、発想の幅や自由度は限定的である。むしろ、ジグソー法は発散というよりも、コミュニケーション活動の中で認識を深めながら収束に向かう傾向が強い。着地点である目標を定めて行う1時間の授業レベルの中では、これが現実的でもある。重要な点は、4つの視点からの発表によって一旦収束しかけた授業の流れに対し、「揺さぶり」の発問によって、収束から発散へと向かわせるところである。「あなたが貧しい小作人の子どもだったら、満蒙開拓団に行くか?」のような一つの問いを中心に二つ目のダイヤモンドを構成し、互いの意見をぶつけ合う展開にすることで、日本社会の抱えていた矛盾や民衆の欲望と葛藤に迫り、より大きな発散と収束の場となる。問い直し・再構成の構造が、1時間の授業レベルにおいて求められるダブルダイヤモンド・モデルの姿といえる。すなわち、二つのダイヤモンドの結節点における発問が、「収束—発散」というプロセスを生み出すポイントであり、学習者の思考を深めることにつながると考えられる。

なお、ジグソー法による学習にダブルダイ

資料4 単元「軍国主義と日本の行方」の目標及び指導計画

(1) 単元の目標

- 世界恐慌から戦争拡大にかけての政治、経済、外交などの諸状況に関心をもち、国民は、なぜ戦争を受け入れたのかを意欲的に考えようとすることができる。(関心・意欲・態度)
- 満州事変から太平洋戦争にかけて戦争が拡大していった経緯や国民生活の実際について、解釈したことを複数の事象と関連づけて適切に表現することができる。(思考・判断・表現)
- 新聞記事や写真、年表など各種資料から、世界恐慌時から戦争拡大への急激な変化の要因を示す特徴的な事象を読み取ることができる。(資料活用・技能)
- 満州事変から日中戦争へと停戦することができなくなるほど拡大し、打開するため東南アジアへ勢力を伸ばそうとしてアメリカを刺激したことで太平洋戦争に突入したことを理解することができる。(知識・理解)

(2) 学習指導計画(7時間計画)

第1次 題材との 出会い 1時間目	<p>主な問い：「さかのぼって100年の歴史をどこで区切ったらいだろうか？」</p> <p>学習内容・活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・100年前から現在の日本を年表で大まかにつかむ。 ・戦前の戦争による死者数と近年の災害による死者数を比較する。 ・終戦直前の1945年の日本や高松の様子を資料から読み取る。 ・太平洋戦争←日中戦争←満州事変というさかのぼりで歴史を眺め直す。
【単元を貫く問い】日本は、なぜ戦争の拡大を止めることができなかったのだろうか？	
第2次 知識・概念 の獲得 2～4時間 目	<p>主な問い：「なぜ、満州事変は起こされたのだろうか？」</p> <p>学習内容・活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・満州事変が15年戦争の幕開けとなったことを把握する。 ・満州は日本の生命線という考え方と満蒙放棄論の両論の存在を知る。 ・軍の力が政治の実権を握り始めたことをつかむ。 <p>主な問い：「ドイツ・イタリア・日本でファシズムが台頭したのは、なぜだろうか？」</p> <p>学習内容・活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・世界恐慌により、各国は自国の輸出を伸ばし、自国の景気が良くなればよいと考えてブロック経済を行ったことにより、国際協調ができにくくなったことがわかる。 ・日独伊という植民地の少ない国でファシズムが台頭したことに気づく。 ・日本では、企業の倒産や大量の失業者が発生し、小作争議や労働争議の激化、家族の身売りが起きていたことを知る。 <p>主な問い：「満蒙開拓団には、どんな人々が参加したのだろうか？」</p> <p>学習内容・活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・満蒙開拓団の目的、内容、結末をつかむ。 ・香川県からの参加状況や背景を地域の写真資料等を通じて実感的に把握する。 ・地域にある田村神社境内の一角の「香川県海外開拓者殉難之碑」のことを知る。
第3次 社会認識の 再構築 5時間目 6時間目 (本時) 新たな見方 価値の獲得 7時間目	<p>主な問い：「日本を悲惨な状況にした戦争が、なぜ大きく反対されずに国民に受け入れられたのだろうか？」</p> <p>学習内容・活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・満州事変についての国民感情を読み取る。 ・学習課題に対する仮説を立てる。 ・政治、経済、外交、民衆の4コース中から、自分の仮説に近いコースを選択する。 ・調べ学習の時間を保障しチーム内の発表を進めていく。 <p>学習内容・活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・チーム内での発表を通して、チームなりの解を考える。 ・問いに対する多様な要因の相互関連を導き出す。 ・軍部の独走だけでなく多数の国民の賛意と協力もあったからこそ戦争が拡大したことをつかむ。 <p>学習内容・活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・チームで作り上げた解を討論を通じて磨いていく。 ・敗戦時のソ連からの逃走の悲劇と中国残留孤児との関わりについて知り、開拓民が被害者であり加害者であるという重層の関係であることを考える。 ・自分の意見の深まりと広がり過程を振り返る。

資料5 社会科学学習指導案(中学校第3学年)

1. 題材 「軍国主義と日本の行方」
2. 本時の目標
 - 単元を貫く問いに対して、チーム内での自分の担当するコースに関する資料を読み取ったり、自分で調べてきたりして意欲的に課題を追究して、戦前の時代背景をとらえようとしている。
 - 国民は、なぜ戦争を受け入れたのか?という問いに対して、多面的・多角的な視点から要因の相互関連を導出し、チーム内の他者の考えや新たな情報に触れることで、自己の考えを再構築して記述している。
3. 学習過程 (○指導上の配慮事項●おおむね満足できると判断できる状況 []評価方法)

学習内容及び活動	指導上の留意点と評価
<p>1 日清戦争から太平洋戦争の終結までの主な出来事を資料や年表から確認し既習内容を振り返るとともに、学習内容に対する問いや思ったことを紹介する。 戦前の政治家批判・民衆の判断への疑問等</p> <p>2 単元を貫く問い(本時の学習課題)を確認する。</p> <p>日本を悲惨な状況にした戦争が、なぜ大きく反対されずに国民に受け入れられたのだろうか?</p> <p>3 チームごとに各自が担当したコースに関する考えを発表する。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; border: 1px solid black; padding: 5px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">政治</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">経済</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">外交</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">民衆</div> </div> <p>【政治】政党政治の崩壊、人権軽視の政治等 【経済】満州の地理的好条件、昭和恐慌の打破等 【外交】関東軍の暴走、対ロシア戦略の拠点等 【民衆】疲弊した農村、人口過剰問題等</p> <p>4 各要因の関連づけをクラス全体で考察する。 【主な揺さぶり発問】 ・あなたが貧しい小作人の子もだったら、満蒙開拓団に行くか? ・満蒙開拓団の目的と実態のギャップが激しい原因は一体何なのだろう? ・あなたが分村移民を送り出す村の村長だったら、どう行動したか?</p> <p>5 影響を与え合った関係を探し、学習課題へのチームなりの解を考える。ホワイトボードにまとめたものを2～3チームが発表する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin-top: 10px;"> <p>(例)</p> <pre> graph TD A[不安] --> B[経済不況の中の農村] B --> C[民衆にとって憧れの満州] C --> D[国策遂行] D --> E[プロパガンダ] F[対露の防波堤] --> C G[反対できない状況] --> D </pre> </div> <p>6 個人で今までの学習を振り返り、学習課題に対する考えをまとめる。</p>	<p>○既有知識の確認は、資料と年表をつなぎ合わせて簡潔に行うにとどめる。</p> <p>○戦争反対という現代の感覚と満州事変時の国民感情との矛盾を感じているものを紹介しながら本時の目標の意識付けを図る。</p> <p>○発表者は、キーワードを記述した短冊を用いることで、チームでの解の作成にスムーズにつなげていく。</p> <p>○考えられる複数の要因をチーム内での分担によるコース別学習で行い、自分たちの考えを共有し合い強化する。</p> <p>社会的な関心・意欲・態度</p> <p>●資料を読み取ったり、自分で調べてきたりして意欲的に課題を追究している。[話し合いの観察、ワークシート]</p> <p>○国民の多くが戦争の拡大に反対しなかった要因が複数あったことを示唆することで、要因の多様な見方・考え方を検証し、矛盾解消を方向付けできる解釈を保障する。</p> <p>○形式的に解答を導き出すのではなく、様々な立場に立たせ、自分が当時生きていたらどう判断したかを想像することで生徒の本音を引き出ししていく。</p> <p>○要因の関連付けを行う際、複合的な因果関係や相互関連を導き出すことが本質的な要因の発見につながることを示唆し、作成済の短冊を活用するよう助言する。</p> <p>○生徒が自力では集めにくい当時のマスコミの報道やポスター等を地域の歴史資料(香川県内の市町村史資料等)から作成した投げ込み資料として活用し、歴史上の人間の営みを身近に感じさせる。</p> <p>○民衆は国策の完全な被害者という認識に偏る場合は、日清・日露戦争の犠牲は領土の獲得によって報われるべきだという地域に残る実物資料で揺さぶりをかける。</p> <p>社会的な思考・判断・表現</p> <p>●チーム内の他者の考えや新たな情報に触れることで、自己の考えを多面的・多角的な視点から再構築して記述している。[ワークシート]</p> <p>○一つだけの正解の図が存在するというのではなく、歴史認識の主体的な構築が大切であることを助言する。そのために、要因間の関連づけの根拠を自分の言葉を用いて説明できるように示唆する。</p>

モンド・プロセスを組み入れる方法としては、各視点を選定する際に、生徒たちからできるだけ多くの意見を出させた上で（発散）、項目を絞り込む場を設け、発散から収束への過程を生み出すことが有効であろう。

IV. おわりに

本稿では、大単元レベルと1時間の授業レベルにおけるダイヤモンドデザイン・モデルの事例を中心に考察した。本研究の意義は、主に以下の二点である。

- ①大単元レベルにおける追究活動・交流活動を組み入れた学習の中に、発散と収束によるダブルダイヤモンド・モデルに類似した構造が見出されたこと。
- ②ジグソー法は、発散の要素よりも収束する過程での認識の深まりに特徴があり、その後の収束から発散に向かう揺さぶりの発問の重要性が確認されたこと。
- ③社会科の授業開発・設計において、デザイン思考とりわけダブルダイヤモンド・モデルの構造を取り入れることが、学習者の豊かな学びを生み出すことに有効であることの可能性が確認されたこと。

企業における製品開発等では、デザイン思考に取り組んでも、誰もがイノベーション（革新）を起こせるわけではない。個人の力には限界がある。孤高の天才でもない限り、一人では難しい。それ故、イノベーションを起こすには、チームによる活発な意見交換と、柔軟な発想の表出、失敗を許す雰囲気などが重要になる。

授業を行う際、私たちは「根拠（エビデンス）をもとに。」「話し合いが空中戦になってはいけ

ない。」「夢物語にならないように。」などの言葉が頭の中をよぎり、子どもたちにもこれらの言葉を発している。これらの言葉は大切であり、これに異論を唱える余地はないであろう。もし異論を挟めば、常識のない者として扱われかねない。だが、そのことが私たちの授業の可能性を固定的な枠の中に閉じ込めてしまっているのではないだろうか。そもそもイノベーションを起こす新しい発想やアイデアは、夢物語のような話や一見遊びのような行為の中から生まれることが多い。社会科教育学の進歩によって、理論的には充実してきたものの、日々の授業が硬直化してしまっは、その意義は薄れる。子どもたちの自由で豊かな発想を生かしつつ、根拠に基づいた論理的な思考を求める。この一見相矛盾した状況の中で、学校現場の社会科教師は苦闘しているのである。

ダブルダイヤモンド・モデルは、単元レベルと1時間授業レベルの中で、入れ子のように重層的に構造化することができる（図3）。これにより、時系列に従って直線的に展開しがちな授業を活性化する可能性が高まる。その際、発散と収束の反復運動をいつどのように設定し、具現化していくかが重要である。その際のポイントは、i) 授業における学習者の柔軟で多様な発想の表出の保証、ii) ダブルダイヤモンドの結節点における学びの省察と再構成を促す「問い」、iii) 思考のための単元の本質に基づいた枠組み、iv) 子どもの活動や「問い」等を支える教師の観（子ども観、授業観、教科観、教材観、社会観等）、などである。

今回は、デザイン思考を取り入れた学習過程の可能性を探る基礎的研究として、実践事例か

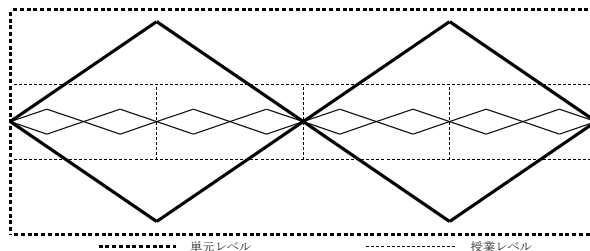


図3 単元と授業レベルの重層的ダブルダイヤモンド・モデルの模式図

らダブルダイヤモンド・モデル構造の抽出を図った。一方で、人間中心デザインプロセスについては、ほとんど検討できなかった。人間中心デザインプロセスは、題材や社会の状況を観察して課題を把握し(観察)、様々な意見・考え・推測等を出し合い(アイデア)、そこから導き出されたまとめ・結論(プロトタイプ)を、もう一度現実社会に当てはめてみる(テスト)といったサイクルになる。その際に、発散と収束が繰り返される構造になるだろう。

今後は、社会科における優れた授業実践について、より詳細な分析を行い、そこに内在するデザイン思考の有効性と課題について検討していきたい⁽¹¹⁾。

【註】

- (1) 千葉敏生「記者あとかき」ティム・ブラウン著、千葉敏生訳『デザイン思考が世界を変えるーイノベーションを導く新しい考え方』早川書房、2014年、p.304。
- (2) ティム・ブラウン前掲書、pp.166-192。
- (3) 森清成「未来社会を生きぬく資質・能力を形成する小学校社会科授業提案ー第5学年単元『自動車産業からみる未来の産業』の場合ー」社会系教科教育学会編『社会系教科教育学研究のブレイクスルーー理論と実践の往還をめざしてー』風間書房、2019年、pp.81-91。前野隆司『システム×デザイン思考で世界を変える』日経BP社、2014年。
- (4) D.A. ノーマン著、岡本明・安村通見・伊賀聡一郎・野島久雄訳『増補・改訂版』誰のためのデザイン?ー認知科学者のデザイン原論』新曜社、2015年、pp.303-309。
- (5) D.A. ノーマン前掲書、p.307。
- (6) D.A. ノーマン前掲書、p.309。
- (7) ティム・ブラウン前掲書、pp.87-93。
- (8) 川喜田二郎『発想法ー創造性開発のために』中央公論社、1967年、pp.74-127。
- (9) 《学習のくくり》による実践は、静岡大学教育学部附属浜松中学校の研究に沿って行ったものである。鈴木は、同校に赴任した2000年度から実践を始め、公立中学校に異動後も状況の変化に応じて形を変えつつ、公立中学校を退職する2014年度

まで行った。本発表で示す資料は、2002年度から2003年度の実践をもとに再構成したものである。鈴木正行「第2学年3組社会科学習指導案学習のくくり『民衆の時代へ』」『平成14年度教育研究発表会「成長する場としての学校」をめざしてー生徒が成長を実感し、未来を展望できる学びー』静岡大学教育学部附属浜松中学校、2002年、pp.67-72。

- (10) 池田良「第3学年2組社会科学習指導案<軍国主義と日本の行方>『国民は、なぜ戦争を受け入れたのか?』」『平成27年度研究発表会要項未来を創造する学びの追求学びの連続性で一人の学習者を育てる教育課程の創造ー考え抜く生徒が授業を変えるー』香川大学教育学部附属高松中学校、2015年、pp.18-23。
- (11) 稿を改めて、香川大学教育学部附属高松小学校教諭(現高松市立川東小学校教諭)の黒田拓志が2018年1月~2月にかけて行った授業実践(「第5学年社会科学習指導案『自然災害から国土と生活を守る』」『平成29年度教育課程特例指定分ちか合い、共に未来を創造する子どもの育成~子どもの育ちを保障する 2 領域カリキュラムの指導と評価』香川大学教育学部附属高松小学校、2018年、pp.86-87)について報告したい。

付記

本稿は、日本社会科教育学会第69回全国研究大会(鈴木正行「デザイン思考に基づく社会科授業開発に関する基礎的研究ーダブルダイヤモンド・モデル構造の視点からー」2019年9月、新潟大学)、全国社会科教育学会第68回全国研究大会(鈴木正行「優れた社会科授業実践におけるデザイン思考の内在的構造ーダブルダイヤモンド・モデルに着目してー」2019年11月、島根大学)で発表した内容をもとに作成した。本研究は、平成30年度学部・附属学校園共同研究プロジェクト「デザイン思考に基づくアクティブラーニング型社会科授業設計に関する研究」(鈴木正行・伊藤裕康・守田逸人・高倉良一・唐澤晃一・池田良・小野智史・山城貴彦・大和田俊)による成果の一部である。